

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 10 月 19 日	
所属部局・職	アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程 2 年
氏名	横塚 彩

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)	
コンゴ民主共和国・赤道州ワンバ村	
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
コンゴ民主共和国ワンバ地域における地域住民の在来知に着目した大型類人猿ボノボの保全研究	
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)	
平成 26 年 6 月 23 日 ~ 平成 26 年 9 月 29 日 (99 日間)	
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
WBCR, CREF	
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。	
今回が3度目のワンバ地域での調査となった。行った調査は下記である ・ワンバ地域(主にヤソゴ・ヤエンゲの2つの集落を中心として) -食物禁忌調査 -ボノボの畑荒らしに関する調査 -ボノボに関する住民の知識調査 -口頭伝承の認知度に関する調査  ・セマ地域(ワンバ村の隣接村。保護区の外): -食物禁忌調査 -ボノボに関する住民の知識調査 -口頭伝承の認知度に関する調査 -ボノボとの接触経験に関する調査  ワンバ村に隣接しているが、保護区外であり、研究者のいないセマ村で調査を行ったことにより、ワンバ地域における住民の在来知識とともに、研究者の存在が、地域住民のボノボを守る意識にどのように作用しているのか明らかになった。 伝承の認知度に関してワンバ村とセマ村では大きな差異はなかったが、ボノボへの食物禁忌はセマ村では弱く、128人への聞き取りのうち、約40人がボノボのブッシュミートを摂取経験があると語った。  今回得られたデータをもとに、現在、修士予備論文執筆のための分析を行っており、11月14,15日のSAGAでポスター発表を行う予定である。	
	
▲食物禁忌に関する調査風景。禁忌対象の動物名を書いたカードをつくり、どの動物なら食べる事が出来るか調査を行った。	▲ボノボの歩き方について説明する少年

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

### 6. その他 (特記事項など)

本調査は、霊長類学・ワイルドライフサイエンスリーディングプログラムの助成を受け、研究を行うことができました。また京都大学霊長類研究所研究員坂巻哲也さんからは調査地でたくさんの助言をいただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。ありがとうございました。